天正遣欧使節団ローマ教皇謁見440周年特別企画海外派遣事業に参加して

税務課　小家松　朋子

　コロナ禍以降ポルトガルへの相互ホームステイ事業が止まっていたこともあり今回の事業は次年度以降へつなげる重要な事業でした。

　生徒達は事前研修の段階から念入りに下調べし、現地での活動へのイメージをふくらませていました。私自身もヨーロッパの歴史に触れ気持ちを高めていきました。事前に準備するものなどリストアップしたものを生徒達に渡して準備をすすめてききました。

　出発日当日は長崎空港での出発式を終え、いよいよ出発なのだと気持ちを新たにしました。

　リスボン空港へ到着するとヴィラヴィソーザ市の市長、副市長が暖かく迎えてくれました。私たちの到着を心待ちにしてくれていて生徒達もそれに答えるよう積極的にコミュニケーションをとっていました。在ポルトガル日本大使館では太田大使が歓迎してくれました。ヴィラヴィソーザ市の市長、副市長同席のもとプレゼンテーションも行われ普段は経験できない貴重な体験をしました。

　また、ヴィラヴィソーザ市では現地の学生との交流や歴史的建造物の見学などポルトガルの文化・歴史に触れることができました。生徒たちは現地の学生との交流で同年代の学生とコミュニケーションをとることができていて、まさに異文化交流だなと思いました。また、特に感じたことは「人の温かさ」でした。天正遣欧使節同様、大村から派遣された4人の学生を感慨深く受け入れてくれたのではないかと感じました。市長からは「うちの学生も大村に派遣するからね。」との発言もあり、今後の交流にも前向きな様でした。

シントラ市ではアンジェリーナさんの案内のもと山火事の影響で計画の変更はあったものの手厚く歓迎してくれました。トラムに乗っての市中見学では遠くからではありましたが、シントラ市にあるたくさんの歴史的建造物を見ることができました。ロカ岬ではサプライズで到達証明書を用意していただいていました。生徒達もとても喜んでいました。また最後の夕食のときアンジェリーナさんから生徒達に「シントラ市へ学生を呼ぶとしたらなんて紹介する？」などの質問もあり相互交流事業に前向きなのだなと感じました。

ポルトガルを去るころには生徒達はポルトガル滞在で経験したたくさんの事を胸に日本での生活に活かせるよう決意を新たにしたことでしょう。10代の時期にこのような貴重な経験ができることはとても羨ましくもあります。外から日本を見ることができるという視点は今後の人生にとってプラスになるものと思います。

また、今回の派遣で感じたことは人の温かさに助けられたということでした。日本から距離的には遠く離れたヨーロッパという異国の地でも人と人との血の通った交流ができるものだと思いました。まさにヴィラヴィソーザ市副市長ティアゴさんの著書にある「自分と異なる『他者』を理解しようとする行動はその特徴的な豊かさを受け入れることである。偏見なしの言葉のやり取りのみが人々に歩み寄りをもたらす。」という考え方に通じるものと思われます。生徒達の「ここは第二の故郷だね」という言葉にもそれが表れていると思います。

最後にこの交流事業に関わることができたことを光栄に思います。たくさんの方々の支えにより私たちはこの交流事業に参加することができました。改めて心からお礼を申し上げます。また次年度以降もたくさんの生徒達がこの事業に参加することができるよう末永く続いていくことを願っています。